

世間解

第四五一号

令和七（二〇二五）年 九月

発行 西法寺

念仏もうさるべし

ーありがとうございますー

九月であります。有縁皆さまにはご本願のおはたらきの中「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏ご相続のことと存じます。

来月は西法寺の報恩講さまです。

十月三日（金曜日）と四日（土曜日）の二日間、どちらも午後二時からお勤めをさせていただきます。初日の三日は午後六時からもお勤めさせていただきます。初日は西法寺住職がお取り次ぎ（ご法話）をさせていただきますが、四日は梯信 暁先生がお越しくださってご法話をくださいます。

また初日三日の二時からのお勤めは、若手僧侶の皆さまが中心となって「初夜礼讃」という大変美しい旋律のお勤めをくださいます。是非ともお勤めにお会いいたしたいと思ひます。

報恩講さまとは親鸞聖人のご命日のお勤めであります。親鸞さまのご命日のお勤めは、ただご法事といわずに報恩講と申しあげるのであります。親鸞さまは弘長二年十一月二十八日のお昼頃にご往生なさいました。以来、毎年ご命日のご法要がお勤まりくださっています。親鸞さま当時の暦（旧暦・太陰暦）を今の暦（新暦・太陽暦）に合わせますと、十一月二十八日は明くる年の一月十六日になりますというので、ご本山（西本願寺さま）では、一月十六日を親鸞聖人のご命日と定めております。弘長二年十一月二十八日を今の西暦に合わせますと二二

六三年の一月十六日になるのだそうであります。今年は二〇二五年でありますから、やがて七六三回目のご命日が来てくださるということになります。

報恩講さま、ご恩に報いるお勤めということがあります。具体的には親鸞聖人のご恩に報いるお勤めであります。

“ありがとうございます”という言葉があります。感謝をあらわす言葉として、

日常的に出てくる言葉であります。改めて“ありがとうございます”という言葉の意味を味わっていただきたいと思ひます。“ありがとうございます”を漢字にすると“有難う”有ること、が難しいこととあります。バサツと申しあげれば“普通は無いです”ということでありましょう。

無いたが有ってくださる。“ほんまやったらこれは無いねんなあ”というところ“ありがとうございます”という言葉が紡ぎ出されるのでしよう。

そして紡ぎ出された“ありがとうございます”にはただ感謝を伝えるだけではなく“ご恩に感じる”“ご恩を感じる”という思いがあるのでしよう。

「ご開山さん（親鸞聖人）さま、ありがとうございます」でした。あなたのおかげで私もあなたと同じお念仏をいただいて、同じ信心をいただいて、同じお浄土で今度は出遇わせていただきます。～とそう親鸞聖人にお礼申しあげるのが報恩講をお勤めさせていただく意味なんじゃないかな」とお教えくださったのは梯 實圓和尚でした。

その梯 和尚のお言葉を承けて山本攝叡和尚は「私に、～親鸞聖人と同じような学問をし、経験をしないさい」といわれてもそれは不可能、無理だといわねばなりません。しかし親鸞聖人が仰がれた同じ阿弥陀さまを仰がせていただくことはできるんでしようね」とお教えくださったのであります。

「ご恩に報いるいうていうけど、私には報いる、返すことが出来るようなものは何も無いのよ。私はこの頃、いただいたものをそのまま慶ばせていただくのが本当の報恩でないかなと味わっています。」とお教えくださったのは利井明弘先生でした。“ありがとうございます”とは本来有るはずの無かったことが有ってくださること。なんといってもその一番は私が今「なんまんだぶ、なんまんだぶ…」とお念仏申す身にならせていただいております。

「阿弥陀さま、ご往生くださいました方々は間違いないに私を支えてくださってんなあ…。そんな事を味わわせていただけるようになったのも親鸞さまのおかげやなあ…。」色んな事が身の上になってくる日暮らしてありますが、一人ひとりがその日暮らしの中で、阿弥陀さまに、親鸞さまにお念仏さまに聞き続けてゆく。どうぞ報恩講さまにお参りください。